



澤田農場の年表

2001年 結婚
 2017年 繁殖農家としての就農を決意
 2018年 地元企業を退職
 2019年～ 唐津市内の繁殖農家の下で
 2021年 研修
 2021年 4月 澤田農場の経営開始
 2021年12月 初出荷

澤田年男さん

澤田望さん


【農場データ】
 農場名:澤田農場
 住所:佐賀県玄海町大字石田120-1
 飼養頭数:母牛37頭

**澤田さん夫妻へ
エール!**

エールを送る人
義父、徳田常博さん

昨年「鹿児島全共」を見学し、ハイレベルな戦いを目のあたりこして、まだまだ学ぶべきことがあると痛感しました。繁殖農家は、一生勉強です。年一産はもとより、受胎率の良い牛を育成し、毎日の観察を忘れることなく、牛に対する愛情と経営感覚を持ち、夫婦仲良く所得向上を目指してください。JAからつ管内は、県内有数の肥育・繁殖の地であり、購買者ニーズに合った地元へ導入される育成技術を身につけ、均一化された子牛生産をモットーに努力してほしいと思います。



1 畜舎外観 2 牛を丁寧にブラッシングする澤田さん
 3 牛の発情を管理する「牛温恵」 4 澤田農場で繁殖した子牛
 5 ジェイエイ北九州くみあい飼料の配合飼料「子牛育成用ジャンプ」
 6 澤田夫妻と関係者の皆さん



未来を創る
 新たな担い手たち

**企業からの転身
増頭目指し夫婦で奮闘**

佐賀県玄海町の澤田年男さん(42)は、サラリーマンから繁殖農家の世界に飛び込みました。妻の望さん(42)と二人三脚で、澤田農場の経営に奮闘する日々。牛にストレスをかけない飼養を心がけながら、増頭を目指しています。現在、就農して2年目の地域の期待の新星とあって、地元のJA関係者からも熱い視線を送っています。

玄海町の丘陵地に位置する澤田農場は、母牛37頭を飼養し、年間25頭の子牛を多久市の県中央家畜市場に出荷しています。牛舎は約892・2㎡の開放型で風通しが良く、外光を採り入れて明るいのが特徴です。牛が密にならないようスペースを広く取り、ストレスをかけるような飼養をしています。主に年男さんが育成や牧草収穫、望さんが哺乳と夫婦で分担して取り組んでいます。

年男さんは同町出身。元々は地元企業でサラリーマンをしていましたが、肥育農家の親戚もおり、牛は昔から身近な存在でした。2001年に実家が繁殖農家の状態を監視するなど、情報通信技術(ICT)を活用した農場での研修経験から、ICTの有用性を実感。そこで、澤田農場では、分娩室にカメラを1台導入するほか、牛の発情を管理する「牛温恵」、飼養管理をスマートフォンで確認・共有できる「ファームノート」など、ICTを積極的に導入し、経営に活かしています。

**ICTを積極導入
分娩事故ゼロを実現**

年男さんは同町出身。元々は地元企業でサラリーマンをしていましたが、肥育農家の親戚もおり、牛は昔から身近な存在でした。2001年に実家が繁殖農家の状態を監視するなど、情報通信技術(ICT)を活用した農場での研修経験から、ICTの有用性を実感。そこで、澤田農場では、分娩室にカメラを1台導入するほか、牛の発情を管理する「牛温恵」、飼養管理をスマートフォンで確認・共有できる「ファームノート」など、ICTを積極的に導入し、経営に活かしています。

望さんと結婚。当初はサラリーマンをしながら餌やりなどの手伝いをしていました。そうした中、義父の徳田常博さん(73)から「高齢になり、このままでは頭数を減らすしかない」と告げられました。「昔から牛との縁は感じていました」と年男さん。悩んだ末、サラリーマンを辞め、繁殖農家になることを決意しました。

年男さんは、唐津市肥前町の繁殖農家のもとで2年間研修を受けました。カメラを使って牛の状

態を監視するなど、情報通信技術(ICT)を活用した農場での研修経験から、ICTの有用性を実感。そこで、澤田農場では、分娩室にカメラを1台導入するほか、牛の発情を管理する「牛温恵」、飼養管理をスマートフォンで確認・共有できる「ファームノート」など、ICTを積極的に導入し、経営に活かしています。

機械を活用する一方、「とにかく観察が大事」と年男さん。毎朝、1頭ずつ注意深く観察するのが日課です。望さんと協力して常に牛を見るような心がけているため、今まで分娩事故は一度も起きていません。

以降も着々と繁殖農家としての腕を磨いてきた年男さん。22年10月の子牛せりでは、最高値となる104万2800円(去勢)を記録しました。年男さんは「(義父から受け継いだ)母牛が良かったのだと思いますが、とても嬉しかったです」と笑顔を見せました。

自給飼料として稲発酵粗飼料(WCS)用の稲を栽培するほか、エンバクやイタリアンライグラスを地元の農家に委託して栽培。食いつきを良くするため、粗飼料は5cm程度に裁断して与えています。配合飼料は、ジェイエイ北九州くみあい飼料の「子牛育成用ジャンプ」などが中心です。

初出荷は21年12月。年男さんは「とにかく不安でした」と振り

初出荷で堂々の80万円
牛舎の増築、増頭目指す

今後は、増頭に向けて牛舎の増築を計画しています。母牛50頭、子牛42頭が当面の目標で、自給飼料も増やす予定です。望さんは「最初は心配でしたが、今は繁殖農家になって良かったと思っています」と話し、年男さんは「義父や地域の皆さんのおかげで、経営できています。まだまだ勉強中ですがプレッシャーはありませんが、増頭を目指して頑張ります」と力強く話します。県内有数の子牛産地で、地域の新星が着実に歩みを進めています。